特 1
1962

国立国会図書館　　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号　特1-1962

ガラス使用

序

麻能布球生ず蚕絹を其術にしてそれぞれ其
筭で猶利を投ん粤州
塚田氏此業を賢く
幸阿り事神蚕撫育事多練
我得し唯一家を傳んより

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

特1 — 1962

都て辨少き人も
年養蚕を心
今清集して
小石塚田氏の曰
島をおひて
ひかつや否顧を
して宜術
ば是を加へ

よを
聊子が國
なれ皆此小
ば其家富貴
天地乃財悉
るに等
生日
夕

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

奥州福島伊達郡保原町

遠藤氏

大坂南堂筆

部秀雯喚書

新撰養蚕秘書目録

第一　蚕に享るの心得の事

第二　蚕諸道具心得べき事

第三　桑前ふるやの沙汰仕やう并極めの事

第四　小蚕養の桑并大霜の時桑やくやきおるる

第五　種ノ上中下ノ分ケ方ノ事

第六　蚕ノ大毒ヲ燻シ除ク事

第七　蚕除ケ羽虫ヨケノ事

第八　蚕ヲ洗フ水ヘ入ル回数ノ事

第九　蚕ヲ仕舞フ回数ノ事

第十　蚕ヲ集メル事

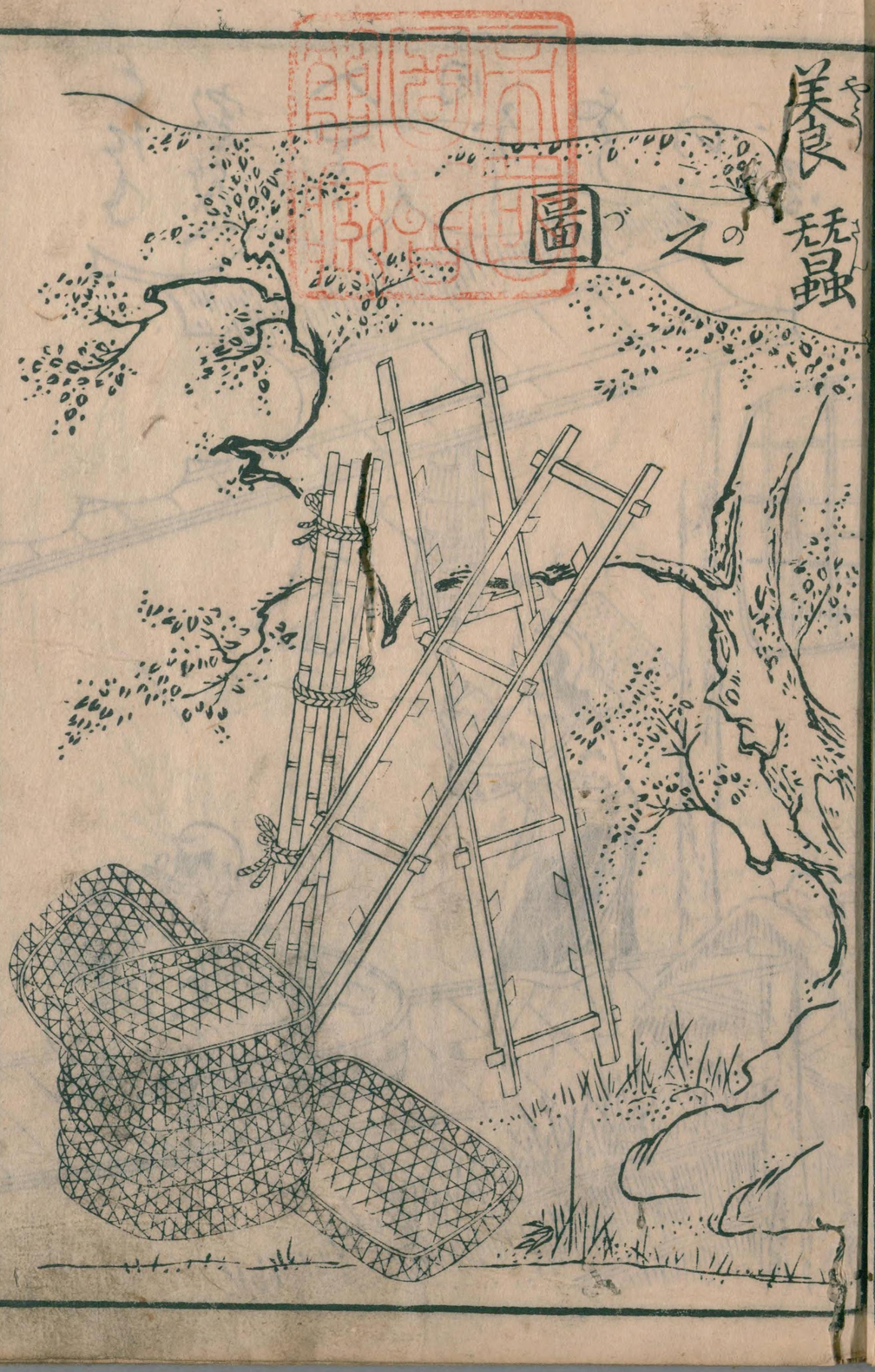
第十一　蚕ヲ掃ク回数ノ事

第十二　桑ノ葉ノ事

第十三　蚕ノ中リ病ノ事

第十四　蚕ノ陽気ノ事

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用



養蚕圖之一

第十五　柳の條上中下子奉りそくの
　　あるゝ時ごとやくのす

第十六　二階作りて蚕の事

第十七　新宅作りて蚕のす

第十八　雹やそひやくの事

第十九　永久の時蒲燒やくの事

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962

ガラス使用

こゝ称
ふまひ
やう
の
絵

蚊帳の
ケ條
の
事

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

蚕は天下の総
出かして男女
老若のわたらひ
となり今年ふるはなし人も
その法をしりそうば蚕に
心をよせ蚕のつげ口をうづ
その利益をしり掃立の日より猶ほの
葉有までの十日余り紙そこ次中食育し
そだてより家しき日ひる耕作をそ
けて暑の候より日にに家をそれ
して葉紙あるゝ又は陽気の変化の紙
ゆべし一日そこ次おくしてそくの合
湿なる候なり時々掃ふらしれ事才一番目二番
目の人は紙のよく行の境界を指行の箸おそ
行の裏を折おとをんなり三番目の人と
紙り蚕のそだちる所ん紙とするび
蚕蛆をおとすんなり又蚕蛆をおとさ
されだをそこのの蚕ありてくひをそこり
柳るの俗にうじやくおなり

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

四ツ目の人ハ大ぶくろとなり
糞くず多くを取りうる
蚕ともに蚕紙
羽ねうすくそろひぬるくなり

三だん

五だん

蚕紙
羽うすく
ものゝ数多く
なりぬ

六ツ目の
人ハ体の
ふとりて次
くだり

六だん

蚕の
中へ
糸を
はく

六ツ目の
人ハ体の蚕
少しを糸を
あつめる

人なり七ツ目の人ハ
蚕皆切れ体なり
山掛ハ廿十一の
ケ條に委し

七だん

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

蚕
こをとって
繭を
作るとき
蔓
まぶし
又は
藁を
四角にいとびやう
組
あみ
木
ぬれ枝
などを
重
かさ
ね

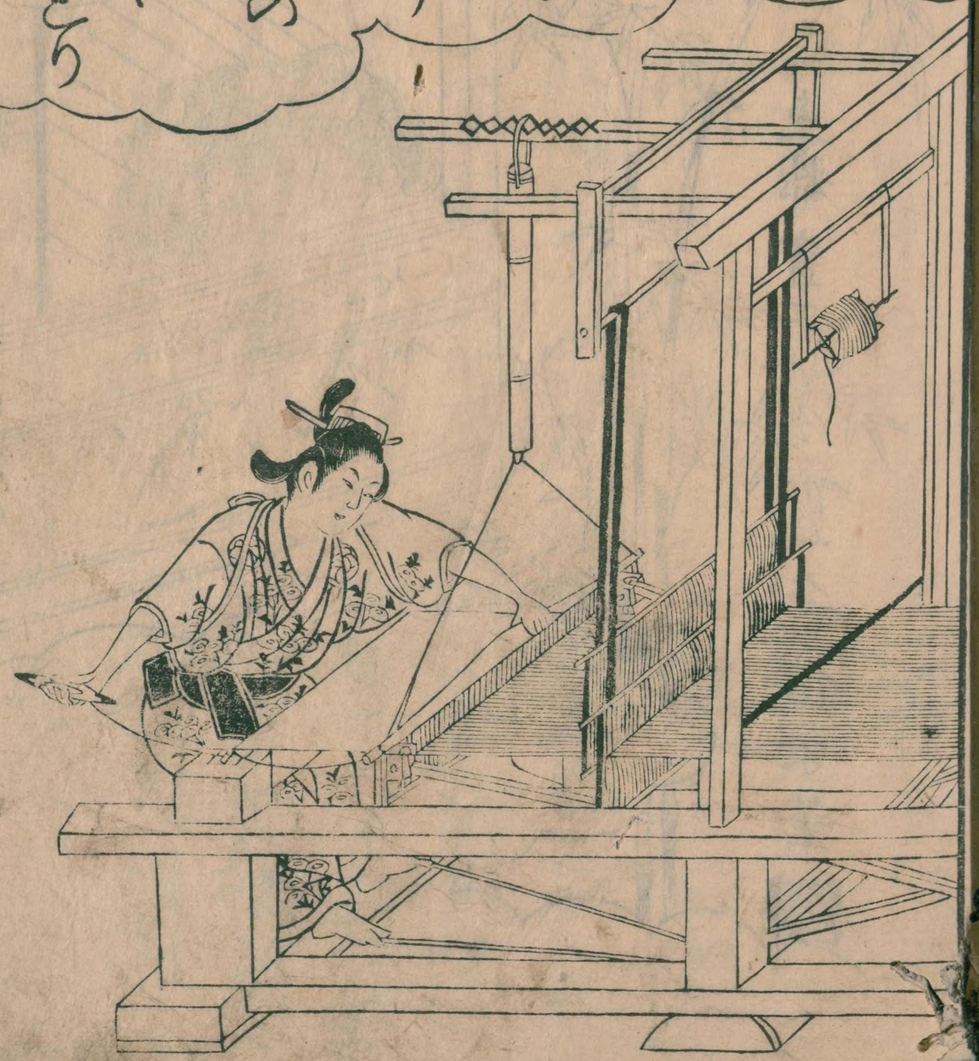
よく蔟をあひは
二階
にげ
揚
あげ
て
繭を
作らせる
別
べつ
やう
の事
は
十八
の
下
ケ
ノ
ト
ル

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962

ガラス使用

蠶事養蚕の始めハ
人皇二十二代
推略天皇の御后
日本紀よ
り
初養蚕
の事



今我國の
通寶と
なれり
きぬ機を
織ことを
傳へ
皇后
ハ
自ら

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

第一蚕ニ至レハ室ヲ閉テ寒気ヲ禁シ
抑養蚕ト雖モ其家ノ真ヲ以テ
忽ニスル勿レ一蚕ハ一匹ノ
名也ヨク〳〵注意シテ
まて飼ヒ死サス我ヲ
唯時ノ陰晴ヲノミ
女ノ陽気ヲトル事
ヨリ多ノ人ヲリテ蚕ノ
陽気ヲ取ル事ヲ

とり遣し又續て二三度とそびる事あり是ハ
たゞ水氣を育ものにぶる也なり合勝をする種な
ども又そのほかとくの事なれども諸人大切の
種えと云つゞきて蚕ハ年の運ひするといふ
ものあり是大きにる遠なり我う誤りをば
もつぱら蚕をそびして後起くの蚕をも犯し他
の蚕繁昌するをそねみ或ハ種えも悪家内のふ
様嫌ふると皆是等ハ小我にして自ら損ずる也
種えハ成丈ケ多く飼欲をかき蚕
分限より餘多く掃立ぶるゆへ次ハ
繁昌の時よりより諸道具人を
業抹なり或ハ農業よと
年ハ初めて蚕を飼ふ者ハ
扱をするゆへ次人ハ
なり則ち書掃立ハ
漬するせたく毎家内の人よ
都ゐ禮の失ハ油断より起るものなれバ掃初てより
人の更り長ゐ一そべのゝ次ハ蚕人来則ち

もつひあるべし〳〵此もの是迄かはあらず
時の由引かへ又おゐて不思議なる事世
よく〳〵我教をも経て御しれ利口と云ひやれ蚕の
御をこんともるいを深くと
よろ〳〵志ゐんなめなり此よ肩目の蛇かをてし
ざるか筆〳〵

第二蚕請渡具中有の人の棚行延約束
之蚕を合の入引とゐんと思ふ
か秋ふくの内は山洞を屋〳〵入拘ふ是あゝと
自ふとあり蚕かして墨のあまり一俣一大義
始未ちよくきものなり大方横三尺長サ四尺位よ
して一間の月へ引枚さしの挟ひもを
ず一場をとらぶどして始末よくき家内原やうあして
蚕かの者を活ど成ん人もるかを純あり又小葉まれ
養棚へる廿六人ふして棚の月七寸位よさして蚕
屋〳〵趣向の種を枚ゐ有右の籠八十枚の挟ひた網蚕
則種を枚の種を揚て七十枚かうをくして
十枚へ俗ふして蚕屋〳〵入拘ふ是ゐそへ蚕中れ

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

年ゐいより大きふ換捨あるべし

第二 桑葉ふせやうの事

桑の實の随ら上葉の種を求をなり浦の内より極
至而一ふして実れおろ時ら枝を綿ふるひおどく
入水にひたしもみそぎこと二度洗山にして村のなき
やうふかきまゞ但一苗ハ其儘その内馬屋糞をとる
またなりて下葉を掛ちをやし一地を平うみしてうをへ
ゐより足の先少して筋をひ右の葉の実うをくまれ
引二ト程ほ掛上へ葉をとをしこし一蓋よして葉をへそろ
時ら蓋をとろへしふ春にあり代おーの時ふたるこ
ゝす位より掛馬屋糞又ハごみなど敷入をちを取別苗生
ーそろ時ら下葉をもり葉を手より第一二寸ふて
未を切べし一時り苗の仕やうい為ゝ上りふ源七寸位ふ葉
のおゝ遠ー長く培土をふすほぐおーてちを取除ら
晴ゞて雨二年目ふ三年目のまにあり根の沢山ゞ
ろ時ら根の換ーげるやうに大切ふこぎ取を葉えよ
つて二寸位に根を掛て切右葉苗代おーのでゝ乃に
ふす位に掛切口をおーまてちを掛筵おーろ時ら

下糞を掛べし　掛ざれば葉小さくして
實一石の葉も育のやきものなれども
取る葉も僅にして損亡多し　但し掃
畑時分ふるひ下人とも紙間をなく掃べし
の次第は畑より引取次第掃葉のもん
根を切捨右の穴へ根を畑の間へ
入込ごみなど紙入をも切掛ざるべし又下糞を掛べし
葉の一生とくべき十年の所は二十年を生ずる
ものなり

實は小葉赤大葉の時葉をもく
かきおる事

葉は年の陽気により小葉赤小葉赤小葉
ともく用ひ時あり葉沢山小掃をも
地ふるく多の間下糞一度掛ざるになりて又一度掛
畑一反に育もるく茅本をものなり麦の後
前ときめとも前葉の根より計ふるまで前
前一割ばかりある時地を上て掃ざるものなり又
大葉の時葉ふるき掃ざる事あり時は葉
根を掘下糞と混く掛又二月ごろ焼灰掃のもの

毎も掛置一日十二時目ゆえ茅おし一旦にわき
置ハ蚕よりの用意のなり

蚕種を浴湯おくりの事
種上中下ともにおくりの事

蚕種を湯浴おくりの時懐へ入るなどくく
包ミ方ニ而ハ骨柳ゆゑく入を上と
包ミ方ニ而ハ次に箱の内ニ
浸紙ニ包ミなせ置ハ天日の強き時ゆえ
風通り種大の例ゆえ包紙ニ
あり合ひの時ハ浸ひ大切おくべし但種よ
上中下ありしん上種ハ無地ニ而
白形と如き又ハ種大抵小実入能たとひ
蛾傷村のなどやうたかも種ありてハ
てもおもこゞをざるをなし場の毒ニ
上種とゝろべし又地ニ而ハ種質ゆ村り
かさを或ハ小抱ゆえ赤足ゆえ
さる種なり其中ニ而ハ又地ニ而ハ
ある而ありて蛾の働なく一所
しそらくえ種ニ而ハ
ハきを下の種ニ而ハ又種大抵ハ

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

夏蚕の種とりべしたゞ夏蚕ばかりを飼ひ白粉をふき種小粒なるものなりこゝる種を收ぶることあり元来蚕のもろとあらの多くうるへ丸くき温なる家あるへし上棚へ揚置おくりある蚕かおるるものなり趣る村かなきをそると種の取あーきへ蚕ちしし人もりなく歩育ろ種なりまた之をあまり見まるるへ生れの種なり蚕のあーしと葉不足なるとき人もろこ足なることあり蚕場の葉少くる

とき遠くの種或ハ他家あーき家の種とし蚕をあくめるると原〳〵育そるとき皆そくよ種りて正〳〵こゝろけあるとのなり是一名をたゞさゞしてと種と丈ハ泥を及ざるども遠まきえもと名の種あるハ中とものとき多く悪種高蚕の新多し是天令小をそざるの把なりえ蚕あそ不せざる人者なり唯漆人蚕成的小りある分小君自也のくはしくをして置育ふおあーくあるをなるが泥を罪ふくらん事も考くもりてなる時

の商売も亦一次ならず人々夫々に種々と下種を為す事
此如くなれば陽家の如く吸なる年少なく別なく悪種を求めて之を造り次いで雌陽家の違う又は我々と違う
或ハ種のわるきなどとも云ひ多年営々の
こと云ひ営々こうしれば卵種の上下ある時なり
亦其の善悪のわかるゝ迄の事なれども
この文を要く書記し置き又
ハ種を求ふる人あらば此書を以て
ありの一粒を求ふる時節も
両国一毛種其外も此通よりは
所よりは遠方の事をも知るべし
人あり是大きに損なるべし唯現在
ごとく心ざし有る場所
をもまもりて奉公
場所をも尋ずおよび種々人
かもとらずと終生とするよ
奉公奮発して富貴
なることの如

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

一六蔟小大毒并燻掃の事

糸繰と焼こもの同板のまな板香気堂塗たること姫毒に燻種水漏魚油臙脂の清し除右大毒なり但一蚕室内に数葉ゐる事ありと雖も醫通へ必ず合申ひ蚕一おとも家妻ひあるべからず又蚕のものへあらざるべし燻掃より早朝より終日まで自然とも常ものて梁杈引ものるはやにおよぶべからず家内に燻焼のなきにても土に姫をこる杤来ハごみ如うに而ふりなるとくふりくるべし

一七蔟除并豚虫ふけの事

猫を先ひ蔟も引除ふくへん鼠のうひ入ふくへんあくの虫もとるを法あるべし又よき蔟を多蔟のうひ道のあたに俗るなありけ杤を砂を棚の掃るべくさしてもくべし一蔟のつぶりくぬなり汚り豚虫ありて蚕の俗ら時多くそんぶす事あり時々ふりけ時々ふりくふりくべし

小兒の生れたるとき二つ折にして
わらにて繭よりも大に包こゝかゞり掛
ぬるを待ちうまひなるを取て
又たの場所に掛をくべし

廿八蚕種を水へ
蚕種は六月より十月までかゝる
その濁をのぞくべし
書たるの目かなるまでうけ
うるか能をもちてかきまぜるなり但し

一日に一度づゝ水をとりかへるべし
惟をのへ種ともにあるひは
之を掛をきて一蚕に暑濕
を防ぐべし蚕のとぢみよく
ものなりめ性を百日あれば
うぶ毛先年奥刀掛口の何糸
糸をもつて掛のへにかけ
その糸切ていづれへも流
ぬるき水にひたしおくべし

なくこそあるかさて蚕ふしうち紙をよくはりたゝみ
ふるひ粉をまんべんなくふりかけて其うへに桑の葉
を置て蚕をうつすべしかくすれば蚕の頭も尾も
皆桑の葉にかゝりてよくくふものなり此ときに
蚕どもの体にうきおとりてあるぞしてよき葉の
ものをみよくふるひ掃ふべし蚕生
大きくなりてくふ盛なり此ときに
ふるひあつべからず
時々蚕のへいる時ありの元服の
頃なり
第九蚕終迄雑用
種の蚕の濃えの見るべき夜づゝあるや
よきを択たゞしを紙袋に入れ名の札よこ
ぶ紙に包三月中旬かた北側窓そ
年内に蚕おくべし

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

りし湯箱の内にておそはるゝ事あり又寒中より正二
月に至る迄寒気強き年は掃立悪し時により
十日ほど前におくるべし考にあり

第十　蚕種おさせやうの事

種紙に裏をつけて天日にあてる所に置あるひハ
懐へ入又ハ火どもし火の側ちかくにおきてよろし唯
種を二三重に折ひろげ紙につゝみ又ハ是をも昼ハ
袷なとに包夜ハ綿入なとに包温かなる家のうち
ところへ掛置火をお焚出し昼の内ハ一度づゝ

ひろげ風をいれ又とり包たるの場所に掛時をへる
おそからずはやからずにして掃立べし若早く種ハ
鴨の羽根より掛置へ温し但し種おさせ時節ハ
いつも水かへ過ぎし渡二日にあへ蚕を出すもの
あまりのなり大きに悪し

第十一　蚕掃立やうの事

種紙掃立の前日種二枚に枚の紙糠を俵の桟へ
に天日にて干紙まていみをとり上のあかし所
をそこひおくべし又掃立初る日に種紙を夜に囊子

ゐ入れ置くべし其内へ蚕を移すまで
りみつぶし簀子へ薄く振り掛け但し掃
を用ゐて掃き取るべし決して
奥に大切の秘事あり先ず蚕
る中へ桝の脇さしを二ツ入
桝のうら底をうく村のゐ
紙ゐ蚕のゐる所へ桝をふせ
うつすこと妙よふ
よの内へ桝を夜の
ある竜の内へ取揃をしたる
まで蚕こ蚕のさうめやう
村とるをり又蚕ほを掛置
蚕座をかきたり蚕子
ゐるくをてる蚕ゐ
らで別蚕ゐの水を吸
一夜ぐるゐ合つぎたくる
生をてゐた気の不足
かくのでこ蚕の柳ゐ

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

ふりそゝの葉あればみつぶしきざみて掛ふ
包(つゝ)みをとゞりて掛べし一ばん
掛(かけ)ふし二日切三日目より葉ばかり
掛べし一ばん葉まで掛て後行のものなり又柳
行の内へ切葉を筵(むしろ)の中へへらし置
ときどき拾(ひろ)ひあつめ一ばんへ
葉ばかりを掛べし但一ばん葉までは切葉
葉ばかりを掛べし但一ばん葉までは切葉
葉ばかりを掛べし

第十二　蚕屎(こくそ)を除(のぞ)く事

蚕屎は蚕の糞(ふん)なり蚕を飼(かう)ときは
又蚕屎あるものなり時々は葉ばかり
掛べし然(しか)るに蚕たくさんに成(なり)て
但一ばん葉にては葉たらざるときは
くさり易(やす)く蚕も病(やまひ)を生(しやう)ずるものなり
きらざる内は又蚕屎を除(のぞ)くこと
うきうつしをして蚕やすめの切(きり)まで
まそこふり葉あるゝけどもこれを
くゝて葉分(わけ)なりこれを能(よく)なりとも
とても蚕のこゝろいたらぬの一流(いちりう)を以(もつ)て教(おしへ)べし

とかく蚕も掃きそこなうことも
葉にくるまぬやうにおもふべし
蚕ごと掃除のくるべし等しき
粟の稗とをくりまぜおくべし
粒もふるくお実のうすきものなり又あく
しておりそるハ種小振みじかく実のうすし
きものなりかくのごとく悪しき
ごとく比なり唯獅子毛蚕の例とするなり
よく入に貯ふべなり獅子毛の問書

くりかへし掃き蚕座とも
ゑ一別掃きの日より皆見うり中蚕
蚕座をそやくゑうへ法御
時おもそ餘の葉まへ小掃
うすくぬり掛こと二へ葉三かさけほど掛篭
とかごの目ぬまるる時おこと
ゑ能ものなり又蚕裏うびくる
糠もふり葉をと掛ゑ一ゑ

かご紙に蚕を柵子葉子多く用ひゐるは
くびおほきものなりおもくしてくびふと
はとろしと云気(き)遣(づひ)ある蚕の後又体に掛り
寒(かん)風(ふう)をいとしく飼(かひ)をまかば中葉も掛けて給
内の仕切(しきり)を明ケかくしつくして火をおこし焼(たく)べし
悪しくして口かはき後に太きに悪しく又葉の多よ
濡(さけ)を吹(ふき)て蚕ハ餅米(もちこめ)紙を揃(そて)り葉にあるあしくるへきあ
はそれハ何の害もあるなるべし尤湿気(しめりけ)など八葉に
毒(どく)ありて蚕の口よりもちてきくゆるとおしくゆる

付用る事ありとも常に用ひハ蚕の後にて葉多
ふらて太きに悪し

第十三 蚕中り(あたり)端(はし)性利と云事

掃立より葉の間(ま)かどの広(ひろ)さ場所(ばしよ)小棚(こだな)とせし
畳(たたみ)よりおとなど高(たか)に棚へさし入ておき籠(かご)とかを
うきを蚕の後よりに熟し紙をのせて上に小なさに
事大きに悪し悪しくして掃立の日より蚕のよく
何(なに)ゆへと掛蚕の後何かと寒(さむ)さをつきさまかハ
まけぬものなりとかくちよくあつくしんはに

蠶ともなり候ては、桑を食ひ候事
夥敷事ゆゑ、桑を多く取入置候
事専一に候、桑を多く取入置候
には、桑の葉をみよく揚ふおと
も専一に候、揚ふおとしまた
桑を多く食候ては、蠶共の
成長を待兼候ものに候、
或は紙帳の中一尺餘を二
桑を揚ふおとし候ては、
桑を行きわたり兼候事に
或はふぞろひなり揚り
なりかくのごとく永引
揚ふおとより桑を待候
利を失ふ事に候、揚ふおとの日
みりてとり掛りてより
十ねんもの蠶は、二度
りのごとくすること
すまず候ゆゑ、とかく
蠶ども揚ふおとし
のごとく桑を揚ふおとし
の後より桑を次第に
ふやし候ては、蠶共
ふぞろひなり揚ふおと

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

の日に移す夜の蚕もとより
よき蚕なり一日より一夜位も
掛又は火ばし等にて掃或は
火鉢を入れ置あるひは
手あぶりにもあるもよし
まけるはよきまゆにてまゆ
ばりものひねくりむしよき蚕づり
ほろかぶりて雨の形をえらび
えり蚕はまゆをかみ切り
わるところそこなくなるべく生
りてもそこなく生まで自然と
ろもあと喰あめ色のうす淡黄
きよりにて安の蚕おし掃ある
て掃まをくべし一夜の内に
て脱ぬけ蚕のうち四ツ綿くり蚕ふし蚕
作蚕もを内へいれて蚕
ある内へ入る

第十四蚕の陽気をつかさどる事

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

掃拭をなすより常に我が身も衣服も清らかにして蚕室へ入るべし
もし掃拭して蚕室へ入るとき風雨の催しあるときは掃除なすべからず
窓あるひは戸口等悉く閉ざして掃除なすべし
三日目に漸々蚕の秘事なり又小蚕のうちは人なども多く入るべからず
蚕室へ入るときは必ず手を洗ひ清めて入るべし
うつぶし人の戸窓を開閉するときは蚕が驚くゆゑ必ず人の戸窓を閉ざすべし
家の戸を開閉するときは必ず静かにすべし
もし家の内外にて騒がしきときは蚕が驚くゆゑ必ず人の静かなるときを考へて戸を開閉すべし
あるひは家の内外にて騒がしきときは蚕が驚くゆゑ必ず人の静かなる家にて戸を開閉すべし
蚕室の内にては必ず静かなる事を専一とすべし
もし蚕室にて笑ひ話等なすときは蚕が驚くゆゑ必ず慎むべし
蚕室にて唾を吐くべからず
蚕室にて洟をかむべからず
蚕室にて放屁おならなどをなすべからず
蚕室にて小便をなすべからず
蚕室にて大便をなすべからず
蚕室にて喧嘩口論をなすべからず
蚕室にて悪口をいふべからず
蚕室にて高声に物をいふべからず
蚕室にて歌をうたふべからず
蚕室にて三味線をひくべからず
蚕室にて鼓をうつべからず
蚕室にて笛をふくべからず
蚕室にて尺八をふくべからず
蚕室にて琴をひくべからず
蚕室にて胡弓をひくべからず
蚕室にて太鼓をうつべからず
蚕室にて鉦をうつべからず
蚕室にて拍子木をうつべからず
蚕室にて鳴物をうつべからず
蚕室にて踊をおどるべからず
蚕室にて舞をまふべからず
蚕室にて芝居をするべからず
蚕室にて浄瑠璃をかたるべからず
蚕室にて謡をうたふべからず
蚕室にて三味線をひくべからず
蚕室にて鼓をうつべからず
蚕室にて笛をふくべからず
蚕室にて尺八をふくべからず
蚕室にて琴をひくべからず
蚕室にて胡弓をひくべからず
蚕室にて太鼓をうつべからず
蚕室にて鉦をうつべからず
蚕室にて拍子木をうつべからず
蚕室にて鳴物をうつべからず
蚕室にて踊をおどるべからず
蚕室にて舞をまふべからず
蚕室にて芝居をするべからず
蚕室にて浄瑠璃をかたるべからず
蚕室にて謡をうたふべからず

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

を之内の仕切とする掛ひ屏風より二ツ折ぐ
らゐを立て火をたきつゞけ焚ぐし但し屏風の
かり人々の化人を天井のさがりもの暗き所
の隙などへ奉灰掃除の時大きなる面一天井
より葉のちりとぶを取り焼りはく
まり昼時ゟ滅するものなり之内ちうじ
うじ天井を覗根ゟり天見あさしめ之後
ぜ陽気そうよりなるものなり又紙帳りてい
うるゝ次第ゟ面うゝ次第ゟ面うゝ次第ゟ
半あるゝ次第ゟ蚕棚の天井をのこらず切ぬ化
夜の明るゝよりみ何まてもの内見ひられを
てゟ蚕棚のこらずぐし又天井の
ゟゝき二階下てゟ天井の内之人ゟ切
あるて蚕ぐし趣して
置きるべゝ次一夜中に陽気変化ろ
てあり蚕ゟ九何ゟり夜の四時までゟ

湯なをさめ〳〵て又冷水の中へ入
く又九時より水の中へ入てもみ洗
湯をつまり四時より引上
ちうちうあつくもみの中へ一夜
掛べし又の朝ふきはり
あつく掛をく事一昼一夜
六時より引上なるべし
時より晴天の日へ干
三月の時分ならば天日のさし
なり去ながら北を明
南なども多くくんをする
と照りぬるし南の隅

北の方へ窓をあけ
なべし又夏も西北をあ
ほす紀州の産へ水を打
延なりともおし
三月の時分ならば天日のさし
なり去ながら北を明
南なども多くくんをする
と照りぬるし南の隅

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

ものなり其時りハ障子の外へ葦簀あり
をかけてふせぐべし惣して高窓のある家
りハ陽気よくまはりよきものなり依て煙出し
ある家をば明ケ置て掛て蚕を飼し去りし葉
くハせる時りハ風をいとふても苦しからずとかく
葉をよくあたへる時ハ病最中の大事にいふ
ものなりこの時りハ絶てらずともにて葉餌
蚕し又わきの内に病る蚕ハ上棚へあげ置
より棚の中へ移し葉をあたへる蚕は

上棚へあげ置くさし之へ蚕し次第に蚕を
用ら棚の上二段時に家中へのこらずひろげ
湯気の時にも下棚へ下し虫のある蚕のうち毒
うまでも過し棚のふさがりたる外の棚
をうつさるべし蚕の気色をとるのぐ事ありがたく
上棚の蚕りも遠あるかくのごとくにへ何
より家内にて火を強くたく蚕のうち湯気も
柳子など大体多く紙蚕あるひハ夜着やうの
をも紙掛かい添着せる人もすぐにあつる事

あまたもちたる人ハこれを家の作りやう又ハ屋敷向
のよろしき家にして寒暑の障なきやうにすべきによろ
しく也人なりかたハこれを用ひとして唯わらめ是ハ能
きのこゝろ得ある蚕子をとらすべくしてもとむる人え
息のぬけぬやうにくり包み温くおさへて先ニ出し
綿子行きてからん事ありてもこれ繭絶ぬのこらバ
わるしおろてしうれし唯蒔ありよりき出す
わるくめでしてめびし葉を掛蚕ニ元を
取り入常に心得なしてへ出る事なれバ

綿子より庭まで乾ろうかもとると寒中をひある
通りて欲に乾虎角綿子を綿の内人の蚕たち生
させば寄まりおぼし急てと出しとまるべし
人ともあらためて急がせだく事なく涼しくして
蚕ハ度々掛葉りて急ぐやうに出し
いろよしなる温暑不及なく年月も遠ひ
取出るる欲ためて積み立てし其ままちかひ
わるバこれを積のお生ましりてぶる也人なり時
種子どもその内ぬきなく出して取出し欲

年の蚕あわらし

寸十ゐ 猶ゐる体上申下并蚕にいろ〳〵の病ひ

掃立ると葉こび〳〵掛ると一ところへ一六日めに七日八日めゐ猶ゐる体ハ中なるべし一ツ目めゐ猶ゐる体ハ下の蚕ところへ一個一蚕に該の病ひあり先猶ゐる体うきの中ゐ色白く節ありて長く身水のおん蚕ほそり、ゐ色ところ〴〵に体毛にあり又猶ゐる体ハ

青葉をよくほし附蚕ところ〴〵ありそこを落るの病ひ蚕ハ葉の滓などに蚕のかゝりあるなり揚り六方位と中ゐ黄又行ゐの時うきほそく頭かりそく煤ゐろまきる葉あるくらゐ蚕ども刻き葉あしてまぶらて揚りよろしおゐ色一ところ稚の節ゐあり〳〵きゐもあり猶ゐる体ハ蚕ところ〴〵あるめあり蚕ハ葉をそちぐるころ蚕一

湯を半ばかりそゝぎ掛ケ置き二日目ニ右蠶種ヲ有合セの布ニ包ミ
あたゝかなる所ニ置キ又竹ニ木の附たる物ニ
ても有時ハ竹ニ包ミ置キ其ニ蠶種ヲ包ミ
ものなどをも掛ケ置キ蠶ハ孵化ニ向ひ
又ハ掃立ニより二日目ニ或ハ三日目ニ孵化
して下ル火ヲ焚キ焼置キ暑ニあたるべし又蠶
蠶なりそ蠶の後ニ成ともまたゝ
くして一旦りふでろひかなりて蠶の眠
りつゞる事ありこゝを刻宅ニ
きもく蠶根より天日ニさし
る蠶なり掃り三日目又休の
らぐて起る事ありそを墜の
く焼墜のものゝ
のこりある蠶ハ
教ゆるまでこ一
蠶ハ孵ゆるまでおくべし

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

廿十六、新宅ヲ建ル事

新宅ハ他人ヲ入レサルヨリノ事ニテ、新宅ヲ建ル日ハ、夜ノ内ヨリ天日ノサス迄ニ、家ノ内ヲ掃除シ、新宅ヲ建ル日ハ、夜ノ内ヨリ天日ノサス迄ニ、家ノ内ヲ掃除シ、

廿八

廿七、蠶ノ病

蠶ノ病ハ多ク、屋根ヨリ雨ノ漏ル所ニ生ズ、依テ雨ノ漏ル所ヲ修理シ、新宅ヲ建ル日ハ、夜ノ内ヨリ天日ノサス迄ニ、家ノ内ヲ掃除シ、

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

柳下そうじ西北のこの
面戸をしめ一間の
一面ならでは
竹ぼうきにて掃き
そのあとなくなり
寸才七二階にて
掃きより
掃きたる北風の吹入あれば二階
てもまた
常に蚕にさわりあり

蚕起りて蚕座
あるく三日めよりそうじ
桑より
二日に一度で蚕座を
蚕の
ようもなり
ものなり又家ひ
揚げ
焼

掛ることは種植る事あり又は時節にて葉に水はなし
又あるへく蚕しかくのごとくなる時十年の内外ハ
かくじ先より絶(とう)までに蚕に大なる痾(じびやう)の年ありて
内外(うちそと)のちかひなく極暑(ごくしよ)のさかりに蚕さかへる事
あれは時々は何ケ度(なんがど)も風(かざ)らにて葉は掛越して
葉(しハ)節(せつ)をよくつもりて大きにおもしろき葉のよ
思(ほ)ひ合(あひ)かゝる時ハ室の内へ湯を吹(ふき)大からぬやう
暑(しよ)をもちへと蚕し又ハ湿(しめ)り葉あらくかくるへ
ゆるみなき事あり又時ハ葉をも乗つく製(せい)し水に

并葉屋へ入へし、まはり麦(むぐ)ぬかしておとしかけざるやうに
又毎(まい)日水一度宛(づつ)并上へ新(あたら)しき藁薦(わらごも)を掛置
遣し七日ほどさらひ見ひても苦(くる)しからず汲
乾して揚(あが)りたるは葉にハ抄宮を入へし蚕かれ汲
又結(だ)三結ハ切捨(きりすて)るはおよりはかちより卵をとかさるべ
し事一なり

第十八 種やしなひの事

種を揚(あく)れば早(せう)中にて洒ふときよりと眠ひきあり蚕
をとむるひを跡(あと)へ葉をも掛二日卯しきむるハならは

国立国会図書館 タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

お蚕ともてのこらず揚畢しまて
しまひより能〻〻ふるひあつめ
稚りて干ある雲ゟ貴賀おくる
おとしわうそやうひの毒ゟ雲のかん
やうみて貴賀おくる又ふるひ
をとくへ年中耕作よ念を
附ふるひあり種のまゝこ
こがらをとりおきおき苅
得ある雲し今ゟし延
さるを苅揚ん時りの二割
ものなりかくのてく蚕ともお
見てかどわきのこらで揚ゟ
取りてのおもらく後ゟの
二割ゟ能ふくり貴賀おんゟの
おしむきあるゟ蚕屋を無
相なきのて雲し夜ふるひ
多のみつゝ又ゟ八時ゟり
ものなりとくむきり和よ一

蚕をとりひろげ糸を蚕氣をとめぬく事蚕の秘
伝なり但しまぬいの時ぐらやとひ栗より
上腹うなり前へやとの座しかゝり候
心しづかにして湯をこぼさぬ風のあるる
前よやとてもしくなしかゝり候

廿十九永日の時雪炭の支

雪ぐらやとひの日より六日めより天日
あてゞ座しまた雪ふりて時々
ぐ蚕ぬりおおらの蚕よ遠ど炉を

指の但しうサこゝへおして
たゞぐらやとの汚まい座をきゝへ
ぬりて未蚕氣かゝ蚕をあり
の火ぶりまして蚕おして焼うる火の
とをゝへ火の除より式へ寸程
こゝへ雪蚕をまぜ行
ぬぐみ蚕のぬるやとの
ることまりまりおぶ
又蚕氣雪うつをおして

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』 請求記号 特1-1962
ガラス使用

右者我初めのひより蚕ひを起し
しより久敷年を経ても究ふまる
ものなり

右者我初めのひより蚕ひを起
しより久敷年を経ても究ふまる
ものなり二十年に及ども其節乃
ごとく変りなく棚ハ桟
敷ニ而も又ハ棚火鉢を用ひ一ト間
隔て一ト重ツゝ蚕ひを掛ケ一ト重一ト棚へ
蚕ひ掛火の側乃
さまへ宜にう而ぞ育右紙掛の蚕
育てハ蚕ひを掛育るとハ二ツ而ハ違
記りなおおくなりて又宜にう而ぞ

る蚕を飼ひよりいさゝかも古に集り
勝れる事なり依て是を飼養の明なる事を
伝得し夫より年久しく築き集ねくの
鑽とうんおし今家が愚意に収め畜事
を悟り得の数人より養蚕の理を書
あらはし小冊十巻ほどいそぎつし
ある人十分にたちあつせ道理を得の卵子
を含くの真偽揃へ綿生てよ子たなり
大いに明なる年めところ違なし

故り殺多の喉む人ありて書写して
これなく我文盲の身として他の
嘲りをも顧みず古今書集開板せ
しむるといへども元来不才にして
文字のかきつひの誤りおからずもあり
ねがはくは養育の理りあらばハおしへと
数ふ事あるまじう候

特1
1962

寶曆十一辛巳初春吉旦

武江書林　日本橋通三町目
須原屋平左衛門

寶曆七載丁丑正月穀旦

信州上田小縣郡上塩尻村
塚田與右衛門著

日本橋通三町目
江都書肆　須原屋平左衛門梓

国立国会図書館　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号 特1-1962
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『新撰養蚕秘書』　請求記号　特1-1962

ガラス使用